

⑤検索システム

この新システムは、今まで業務別にファイルを維持していたのに反し、書誌データはすべての業務からアクセスできるよう一つの目録ファイルとしている。

SWALCAP では、参加館に端末機だけでなく、ミニコンも配置しているが、センター側にも同様なミニコンを置き、システム開発、障害対策等に前向きに取り組んでいる。また、参加館の規模や、必要とする機能に応じたシステムを作成提供するので、参加館では、次のような要素を考慮し、費用に応じてハードウェアを選定できる。

- ①所蔵タイトルの量（複本は除く）
- ②蔵書数（複本を含む）
- ③年間貸出冊数
- ④利用者数
- ⑤年間受入冊数（複本を除く）

現在参加館23館、約400台の端末をサポートしているが、上述のスタンドアロンシステムの完成は1986年6月の予定であり、徐々に新システムに移行するものと思われる。

4. おわりに

このような地域ネットワークとは別に、ロンドン大学では、全学約60の部局図書館の機械化を調整する委員会(LRCC: Library Resources Co-or-

inating Committee)を設置し、きめ細かな計画のもとに電算化を行っている。また公共図書館でもいくつかの分館を包括した独自システムを構築しているところがある。

英国における図書館業務機械化の特徴は、大学、公共および専門の各図書館が同一システムに参加し、地域ネットワークを形成していること、PSS (Packet Switching Services) による全国通信網が発達しており、広範囲にわたるネットワーク形成が可能であること、またネットワークによる機械化の長所(①各館で電算機をもつ必要がない、②共同システムなら1年以内に導入できる、③システム設計、プログラミングを行う必要がない、④電算機の専門家を配置する必要がない、等々)を最大限に生かすため、北米で開発されたシステム、例えば GEAC, OCLC や ALS (Automated Library System) を導入している館が少なくない。

今回、大学、公共、専門および私立の各図書館を逐一訪問し、機械化の現状を調査し、我が国での東京大学文献情報センターを中心とした全国図書館ネットワーク形成の早期実現を痛感するとともに、このような機会を与えて下さった関係者各位に深く感謝する次第である。

(附属図書館学術情報掛長)

第5回国際医学図書館会議ひらかれる

日本大学会館を会場として開催された、第5回国際医学図書館会議を記すには、先ず、国際会議について、当初から現在までの経過をお話ししておく必要があるであろう。

医学の進展と共に急増の途をたどっている医学情報は、近年の研究活動の成果はもとより、広く関連諸科学をも積極的にとり入れ、益々高度化し専門分化されつつある。その膨大な情報量と、多様化してゆく情報活動に、医学図書館として、的確かつ迅速に対応してゆくためには、国際的な協力活動を維持してゆくことが不可欠な問題であること等、医学の発展に即した図書館機能や、図書館職員の向上その他、関連の諸問題を検討し解決

してゆくことを目的として開催されることになった。

1953年(昭和28年)にロンドンにおいて第1回会議が開催された。これは、世界で初めての医学図書館員の会議であった。世界第二次大戦終了後間もなくの開催であったが、我が国からの2名の出席者も含め、33カ国、約300名が参加し、57にのぼる研究発表がおこなわれている。

第2回は1963年(昭和33年)にワシントンで開催された。日本からも「書誌学目的のための機械利用」について発表される等、来るべき情報化時代は、この会議の発表論文の中で、すでに予言されていたようである。

アムステルダムで1969年（昭和44年）に開催された第3回では、慶応大学において開発の「コンピューターによる逐次刊行物の管理システム」に多くの興味と関心が示された。また、医学情報処理や機械検索等図書館の技術的な面をのべた論文が多く取り上げられている。

1980年（昭和55年）には第4回がベオグラードで開催されている。この回からテーマが決められた。それは、「発展する世界における医学、医療情報」であった。図書館活動の先進国では、医学関連分野のデータベースのオンラインによる利用も、既に一般化の時期であり、発展途上国との差が発表論文等で表面化した会議であったといわれている。IFLAの生物・医学図書館部門の意向が入ってきたのもこの回からで、論題も発展途上国といわれる国々のものが多くなってきた。

そして、第5回が1985年（昭和60年）10月1日から4日迄を会期として東京で開催されたのである。参加国は実に、世界の国の約半数という63カ国、出席者は外国人257名、日本人311名の合計568名であった。

今回のテーマは「医学図書館—1つの世界—資源・協力・サービス」であり、発表論文数も我が国からの29を含め、120にのぼった。その数は1953年の第1回の時の倍にあたる。発表論文については、いずれ雑誌等に掲載されるはずなので、その方におまかせすることにして、ここでは、日本の

一医学図書館員として参加し、感じてきたまますを記してみたいと思う。

先ず、医学図書館活動での先進国も発展途上国も、図書館の規模の違いはあるものの、立場は皆同じという共通意識のもとに63の国が集ったことの素晴らしさを痛切に感じたことであった。研究成果についての自信に満ちた発表や、問題点についての忌憚のない討議が、会議場の雰囲気をもより熱気に溢れたものにしたようである。

今回の論題の主力の1つとなっていた機械化の問題について、業務の自動化や情報の蓄積・検索、また、利用者に対するサービスのスピード化のために機械を使用している図書館の増加に対し、また縁遠いものと考えている小規模図書館がある一方で、より小規模な図書館でのコンピューター利用が可能になってきている状況が、今後の機械装置の技術的改良と共に、どれだけ業務の改善や促進につながってゆくか、また、もう1つの問題とされていたネットワーク化についても、先進国も発展途上国の双方共に重要な課題であるが、国際的レベルで進めるにはまだ多くの困難が山積している。これ等の問題が、1990年（昭和65年）にニューデリーで開催予定の第6回において、どのように解決され、進展しているかを想像する時、国際医学図書館会議の意義の深さと、役割りの大きさを感ぜずにはおれないのである。

京都大学附属図書館利用規程

（趣旨）

第1条 京都大学附属図書館（以下「本館」という。）の利用については、この規程の定めるところによる。

（図書館資料）

第2条 本館に、次の図書その他の資料（以下「図書館資料」という。）を置く。

- 一 貴重図書
- 二 普通図書

三 参考図書

四 逐次刊行物

五 その他の資料

（利用者）

第3条 本館を利用することができる者（以下「利用者」という。）は、次の各号に掲げる者とする。

- 一 本学の名誉教授
- 二 本学の教職員